

Y01a 公開講座 48 年の実践

篠原信雄、瀬尾兼秀（駿台学園）、中嶋浩一（一橋大学）

駿台学園中学高等学校では、その教育理念として「学校は社会と隔絶して存在するのではなく、つねに社会とともにある」との考えに立ち、1965年、口径20cm屈折望遠鏡の設置を期に、地域社会に開かれた「駿台天文講座（月例）」と「七夕星を語る会」を公開することになった。その後1971年には、反射望遠鏡の鏡を研磨する「望遠鏡研磨講習会」も開始、さらに1984年には、都会から離れた群馬県・北軽井沢の学園の林間施設に「口径75cm反射望遠鏡」を建設し、四季折々に天体観望会を行なっている。これらの内、特に夏季のものは3泊4日の「夏季天文講座」、冬季は2泊3日の「天体写真撮影会」とし、特別講師を依頼して運営されている。

本年度で、月例講座および七夕星の会は48年目となり、また北軽井沢観望会は30年目、研磨講習会は37回を数えることになった。そこでこの機会に、これらの実践について、その経過、成果、検討課題、および学校教育との関連などを総括的に報告する。